古文書の紹介(2)

木札 明治初期の読み書き教材

郷土調査担当では、郷土に関する資料を幅広く調査・収集し、貴重な資料の散逸や破損を防止するよう努めています。収集した資料を保存し、活用することで、佐賀県の学術、文化の発展に寄与することを目的として業務を行っています。今回は寄託資料から紹介します。

● **資料名**　字合(じあわせ)[松田１１７]　明治10年代

字合は、旧小城藩の家臣であった松田家(現佐賀市)に所蔵されていた資料です。写真で御覧のとおり、大きさはカルタほどで、一枚の木札の表と裏にそれぞれ漢字と読み方が書かれています。木札は楷書と変体仮名で一組となっており、現在約600枚(楷書296枚、変体仮名299枚)が残っています。楷書の読み方は片仮名、変体仮名の読み方は平仮名で手書きされています。

木箱の表面には、中央に「字合」、左に「松田冨」と墨書されています。一方、裏面には「明治十九年拝領」と明記されています。このことから、この資料が明治時代の10年代には製作されたことが分かります。また裏面には「縦十三枚／横二十四枚」と墨書されています。木札を納めた箱は一枚の板で上下に区切られ、２段となっています。「縦十三枚／横二十四枚」は、木札の数を示したもので、木札を上下段に納めると624枚となります。つまり、300以上の単語が木札に書かれている計算となります。字合は家庭で子供の読み書きの学習に用いられたものでしょうか。

さて、これら木札には、日常生活に密着した「姉妹(あねいもうと)」「着物」といった言葉はもちろん、「銀行」「電信」「鐵道」といった文明開化を象徴する言葉が書かれています。また、「香魚(あゆ)、烏賊(いか)、海鼠(なまこ)」といった難しい訓読みの文字が多数含まれています。さらには、地方都市の「博多」「真岡(まうか)」「米澤(よゑざは)」「吉野」は木札に書かれていますが、京阪、東海の大都市名は見あたりません。

言語学的には「草鞋」が「ワランヂ」と前鼻音(ヂの前に鼻音ンを伴う現象)が見られることも注目に値します。前鼻音は一般的に佐賀には見られない現象です。「オシドリ」が「ヲシドリ」、「エリマキ」が「ヱリマキ」とワ行で書かれていることも興味深いことです。また、同じ文字でも、楷書と変体仮名に違いがあります。例えば「衣裳」は「イショウ」(楷)「いしやう」(変)、「栗梅」「クリムメ」(楷)「くりうめ」(変)となっています。一方では、羊羹は「ヤウカン」が一般的ですが、この資料では「イヤウカン」(楷・変)と特徴のある書き方となっています。

このように、字合は、明治10年代の言葉を考える上で、貴重な資料だといえます。

ワ行の字合(上段が楷書、下段が変体仮名)